第4回　近畿圏広域地方計画学識者会議

１．開催日時：平成 20 年 11 月 27 日（木）　10:00～12:00

２．場　　所：大阪合同庁舎１号館　第一別館大会議室

３．出 席 者：別紙参照

４．議事要旨

挨拶

（事務局）

・ ご存知のように、平成２０年 7 月、国土形成計画の全国計画が閣議決定された。それを受けて、正式に協議会が８月に発足した。１０月に第１回協議会を開催し、中間整理をとりまとめたところである。それまでも同じメンバーで４回議論してきた。先生方には以前もご意見をいただいたが、本日は協議会でお諮りした中間整理案について説明し、忌憚のないご意見賜りたい。

（事務局）

・ 配布資料の確認等。
・ 座長は小林委員であるが、本日欠席のため代理として宮川委員にお願いする。事前にお願いしたところ了承されたので、本日進行いただく。

（1）中間整理について

（2）主要プロジェクトについて

（宮川先生）

・ 座長代理を務める宮川です。さっそく議題に入る。議事の（１）中間整理についてと（２）主要プロジェクトについて、一括してご説明願う。

（事務局）

・ 資料の説明。

（宮川先生）

・ 先生方の専門分野を中心に、幅広い視点でのご意見をいただきたい。時間が限られているので、お一人約５分程度でお願いする。

（大石先生）

・ 網羅的にまとめられている。第１回の会議のときに、「近畿」を、例えば「九州」に置き換えたら違う表現になるのかという指摘をした。今回は、近畿ならではという部分が出ていて、ずいぶん良くなった。

- 計画を進めるには、財政が厳しい状況のもとでは、選択と集中をしなければならない。それについての考え方をどこかで述べておく必要がある。プライオリティを考えていく道筋や軸を示す必要があると思う。その上で、関西が首都圏に代替しうる唯一の地域という認識と、それに対する覚悟が欠けていると思う。首都圏に代替しうるという表現には注意が必要である。関東で何かあった時に関西がフォローできるという書き方は極めて消極的である。むしろ、関東に対抗できる第２軸として持つべきものは何なのかという認識が必要で、それだけのポテンシャル、集積があり、インフラも関東に次いで整備されているのだから、そういった覚悟が必要である。関東は８都県市で会合を続けていて、ディーゼルのＰＭの排出基準は関東が決めた。関西の方が沿道環境状況は厳しいにも関わらず、関西からは発信できず東京から発信された。結局全国のディーゼルの排出基準が関東の８都県市の規格で決まった。関西は何をしていたのか。これを恥とすべきである。今なお首都圏への人口集中が続いており、関西は人口流出を続けている。なぜ人を集めることができないか反省が必要。関東圏と対抗できる圏域＝第２軸をつくるには、昔なら関西だけでできたが今は難しく、立地の代替など補完関係にある中京圏との関係を意識的に深めていく必要があると考える。
- 「文化首都圏」は言葉の意味がわからない。何をするのか何を持つべきなのかを、もう少しはっきり記述するべき。このままでは、言葉の遊びで終わってしまう心配がある。地域の多様性をもっと強調するべきである。例えば神戸、京都は、大阪を小型化したまちではない。関西は多様な特徴を持ち、多様な価値を認める独特の文化を育んできた。これは、この国の持つ日本国の文化の特徴であり、関西で発展してきたというところをもう少し強調できればと思う。
- 交通について、ミッシングリンクの解消という考え方はヨーロッパ的で良い。反省すべき点は、阪神淡路大震災のとき日本の東西軸が切れたことである。それは需要追随でものをつくるという論理を是としてきたからである。例えばドイツのアウトバーンは需要の多いところのみならず、国土全体へ網を敷くという考え方である。日本も、国土全体をどう使うかを考えて道路網も鉄道網もレイアウトするべきである。そうすると交通軸の新しい価値観を提案したことになると思う。ここまでまとまったので、あと一歩お願いしたい。

（小田先生）

- 私の言いたいことは、大石先生が代弁してくれた。全般的によくできていると思ったが、これを中部、中四国、九州に置き換えたとき、同じことが言える部分があるのではないかということが気になった。
- 首都機能のバックアップ機能を関西が果たすという書きぶりは消極的と感じる。もう少し積極的な姿勢、立場を強調すべき。
- 前の学識者会議でも言ったが、関東は東京を中心に一極集中になりながら各周辺の良い面を出している。関西の場合、京阪神がなかなか一つにまとまり

にくい。京阪神を現状のまま進めるのか、それとも京阪神をまとめて東京のように第２首都機能をもたせるのか分からないまま、従前どおりの流れで書かれている。また、京阪神が中心に書かれすぎて、和歌山、滋賀、京都北部など周辺地域が見えない。高速道路についても、中心部同様周辺部も重要であり、三重や紀伊半島にも整備されればよい。現在はドクターヘリの導入など利便性は高まったが、それに道路が加わると医療の面でも更に役立つのではないか。

- 防災について、和歌山は東南海・南海地震が起こるという危惧がある。災害は予想しないところで起こる。日本全体が考えねばならないことで一部の地域で考えるものではない。日本全体で連携して取り組むべきことである。
- 関西は基本的に京阪神が中心で、他の地域との連携をどうするかのビジョンが見えてこない。関西には、日本最大の半島である紀伊半島があり、日本一の琵琶湖があり、文化もある。関西は特異な存在だということを、そこをもっと前面に出す必要がある。大学では、半島研究を進めようとしている。研究することでそこにいろんなものが関わってくる。大学を中心に関西が一体となってやっていけないか。

（音田先生）

- 記述されている「目指す姿」はその通りであるが、全体をまとめたものが「首都圏とは異なる多様な価値が集積する日本のもう一つの中心核」で、その多様な価値の一つが多様な文化「本物」であり、関西圏としてのまとまりなどと思う。姿２の「日本のもう一つの中心核」を１つ上に置くか一番前に置いた方がまとめやすいのではないかと思う。そうすれば、全体としてすんなり読めるという感じがした。
- 文化首都圏という構想は、首都圏とは異なる多様な価値ということで、一番目に挙げていただいているのはありがたい。文化首都圏プロジェクトの概要として３つ挙げられているが、本物が単なる地場産業のものづくりに偏っている印象である。関西の本物は、伝統芸能や歴史的文化遺産で、それらの振興を図るようなものが必要なのではないか。例えば上方歌舞伎などは、もともと関西発祥の文化にも関わらず、公演数や観客の動員数は東京にもっていかれている。関西を文化首都として位置づけるのであれば、覚悟をもって取り組むべきであり、「本物」のという概念の整理が必要である。また、関西ブランド的なものは「本物」に間違いないが、「本物」とは書き分けが必要である。「ほんまもん」と聞くと余計に疑い深くなる。この表現でよいのかと思う。
- 関西は京阪神が中心で、大阪・神戸・京都のみが取り挙げられがちである。文化首都圏プロジェクトの中で平城遷都の記念事業が取り挙げられていて奈良の人間としてはうれしい。自身は平城遷都に関わっているが、その取り組みの中で関西の他地域と一緒に取り組むというアピールが不足していると感じた。関西一体でという姿勢は必要かもしれない。
- 知の拠点について。次世代産業といってしまうと、自然科学分野がほとんど

であるが、これからの時代、関西から才能ある人材を生むためにも、理系のみならず文系学問の知の拠点の役割は重要だと思う。阪大の２１世紀懐徳堂の取り組みもあり、関西の大学からの動きを含めた表現にするべき。大阪駅北ヤードの構想では、ロボットテクノロジーなどこれまでにない具体的で広い視野での研究がなされている。次の世代につないでいくような伝統文化、漫画文化など文化芸術的な発信も進んでいるので、知の拠点については、もう少し広い意味で取り上げていただきたい。

・ 目指す姿の４と５は関係が深い。５の都市的魅力と自然的魅力を日常的に享受できる圏域というのは、都市部と周辺部が近いので行き来しながら享受しようというスタンスだろう。東京は都心に潤いがなくなっている。都心に緑をもってくるなど、思い切った取り組みも関西には必要。主要プロジェクト同士が複雑にからみあっているところも多いので、もう少し整理すべき。

（桂先生）

・ 文化首都圏プロジェクトのほんまもん宣言について、近畿圏のアイデンティティをどこに求めるのかについて議論してきたものを形にしていただいた。私もほんまもんという言葉に若干違和感がある。近畿圏以外の圏域、外国に対して日本のほんまもんを発信するなら、名称を考える必要がある。文化や伝統は非常に重要と考えているが、いろんな産業や品物にも文化や伝統を表現しているものがあるのだと改めて認識した。もっと立体的にほんまもんを表現できればと思う。
・ 農山漁村活性化プロジェクトについて、近畿圏内で大きな地域格差があり、それが広がっているということを認識する必要がある。近畿の北部や南部では、交通や情報インフラなどがまだ不十分なので今後もっと持続的に整備していくべき。農村サイドからすると、都市と農村の共生対流が課題としてある。例えば、丹後の北の端までは日帰りでは難しい距離であり、共生対流には限界がある。交通網の整備は十分な課題として認識している。
・ 疲弊した地域産業を活性化させるのは難しい。地域のコミュニティも疲弊している。地域リーダーの育成は重要であるが、一番大きな役割を果たすのは基礎自治体である市町村と考える。しかし、市町村は財政的問題による人減らしをしており、地域に目が向かない状況である。国全体のグランドデザインがあるべきなのに、自治体の権限、財源をどうするかが見えてこないのでプロジェクト自体がふわふわしている印象を受けている。
・ プロジェクトの主体が明確でない。全体的に良いことが書いているが、抽象的な印象をもつ。具体的にあげて欲しい点は、例えばほんまもん宣言についてであれば、近畿版ＡＯＣのようなものを近畿からつくって欲しい。ＡＯＣとは、フランスでやられている原産地統制呼称制度である。信州ワインなどはＡＯＣをとっている。日本のＡＯＣを近畿から発信してほしい。近畿にはそれに対応するくらいの伝統的な料理や食材がたくさんあるため、是非、関東からではなく近畿からやって欲しい。

・ 農山漁村活性化プロジェクトは書かれているとおりである。具体的に都市と農村の企業や経済主体が出会う場であるプラットホームをつくって欲しい。
・ 環境、資源、森林保全はひとつにつながっている事柄である。これらについてそれぞれの主体をどのように巻き込んでいくか、その具体的な仕掛けが求められていると思う。

（事務局）
・ 主体が固定できるかどうかはプロジェクトによるが、今後協議会のメンバーで記述してく予定である。
・ 「ほんまもん宣言」は仮称である。以前「関西ブランド宣言」といっていたが、堅いのではという話になった。前回の協議会でも議論になり、コンセプトとしては賛同いただいた。今後、名称も含めて練れればと思う。ほんまもんのコンセプトは幅広く考えている。地域の伝統文化も含め、様々なものがあるだろうが、今回は例として地場のものを挙げている。関経連などでも、これらを外に発信しようと考えている。

（加藤先生）
・ ３点申し上げる。
・ 言葉尻をとらえるようで恐縮であるが、４ページの目指す姿２のタイトルにある「首都圏とは異なる」という言葉は必要なのか。例えば、海外の人がこれを英訳で読んだ場合、理解できないかもしれない。「日本のもうひとつの中心核」もグローバリゼーションを叫んでいる昨今、このページだけは、日本にこだわっている印象がある。せめて、「アジアの中心核」くらい書いてもよいと考える。５ページの目指す姿３のタイトル「アジアをリードする」という表現も不要ではないか。中身をみると心意気はわかるので、キャッチフレーズにわざわざ説明を加える必要はないのではないか。
・ 経済的な競争力という観点からすると、全体像として弱い印象がある。今は、グローバル化をこえてグローバルサーキュレーションの時代。更には、コロケーションという、巨大な都市圏域が世界を牽引する構図がはっきりしている。広域計画をつくる際、世界の中での経済競争力をどう提示できるかは、最も重要なポイントだと思う。そういう目で見ると、例えば、１４ページ、１５ページは経済化を核にこの地域を牽引していこうということで、比較優位のある点はうまく整理されているが、戦略性という観点では少し物足りない気がする。ＯＥＣＤの経済戦略は、様々な多様な主体や産業のインターフェイスの部分がはっきりと示されている。これらは重要なポイントである。ここにある、ナレッジキャピタルなどとのインターフェイスにどういう形で政策的展望が描けるかの観点が必要である。ナレッジエコノミーは、文化、歴史など産業と全く違うと言われたものとの接点をどう見出すかというところに突き進みつつある。このあたりを経済的競争力という観点から書いてほしい。地域経済はダイレクトに都市圏域の産業構造と結びついているという

ことが論文で数値的に検証されている。例えば、大阪湾のパネルベイとナレッジキャピタル、大学などといかに結びつけるかを、もう少し踏み込んで書いてほしい。広域的なイノベーションプラットホームの構築も必要。

・ 関西の地域経済の魅力や強さは、地域のもつ固有の産業経済のあり方である。例えば地域に根ざした中堅企業群の醸成、関西に拠点を置く企業を大事にする視点が重要である。

（河田先生）

・ 防災の専門家である。参考資料をみたところ、最後に防災が書かれている。これは富も何も生まないというネガティブな発想である。成熟社会では今のものを失わないという覚悟がいる。大震災では家がつぶれて難渋した。絶対失ってはならない財産がある。失うと致命傷になる。富を生むだけのプロジェクトを組むという考え方は間違っていると思う。もっと防災を日常的なところから判断しないとこういう記述になってしまう。文化は確かに大事である。木造建築は非常に弱く、地震が起きると、国宝、重要文化財は、確実に倒壊する。伊勢神宮はある期間がきたら建て替える。奈良・京都はこのままでは文化財を保存し続けることは無理である。文化財の歴史を見ても、かなりのものは焼けているが、建て替えられたのは財力があってこそ。地震は起こらなければ起こらないほど危険ということ、長年起こってない地域は一番怖いという認識がずいぶん欠けている。これまでの開発を見直すべきである。

・ 具体的な目標はどうなっているのか。戦略の期間を長くして２１００年の目標等も考える必要がある。１１．広域防災・危機管理プロジェクトを見ると、戦後最大規模の洪水に耐えうる河川整備とあるが、河川整備は暫定３０年である。その３０年のしばりの中で各県の知事は意見を言っておられる。意見を重ねても３０年過ぎるとだめになる。３０年後、間違いなく温暖化が進んで超過洪水が起きて大変なことになっているということが、大規模水害対策専門調査会に出ている。首都圏の荒川と利根川の具体的な防災水準をどうするかという議論をしている。ここでは５００年や１０００年先の洪水対策について話し合っている。ところが、こちらは暫定３０年の話をしている。１００年先を考えたうえでの直近の３０年をどうするのかという議論がなされていない。防災が進まない原因は、枝葉末節なところにメディアや知事というトップもとらわれていて、本当の意味でのプロジェクトが動かなくなっているところにある。戦略というからには、そこにアクションプランをつけるべき。アクションプランは一体誰が責任をもってやるのか。近畿地方整備局が全部やってくれるのか、自治体は何をするのか、その道筋をある程度見せていただきたいと思う。

・ 東京との整合性はどうするか。例えば地球温暖化がこのまま進むと、大阪にやってくる高潮は0.P.＋６．２ｍで今より１ｍ上がる。そうなると防潮システムを全部つくり直さなければならない。東京湾周辺では羽田空港以外は水没するからどうするかという議論になっている。しかし、近畿地方整備局の中

では情報が共有されていない。近畿地方整備局の委員会でも私は再三水没危機の話はしてきたが、全く反映されてない。現在パナソニックが尼崎に工場を建設中であるが、将来を見越した防災対策をやっているかどうか誰も指摘しない。つくってしまってからでは遅い。失わない努力は今からしなければならない。シャープ堺工場はきちんと対応してくれた。0.P.＋８．５ｍで工場を建てているから絶対安全である。経営者として先見性をもっておられる。首都圏の代替みたいなけちなことはしなくてよい。霞ヶ関も丸の内も完全に電力は２系統になっており結局首都圏は強い。地震が起きたら、確実に大阪の方が被害は大きい。現状の評価をしなければならない。新しいものを生む時代ではなく、今もっているものを失わないようという配慮が必要。

（事務局）

- 大事な話である。この中にはベースの部分が欠けているので、是非参考にしたい。

（黒田先生）

- 整理できてないので雑駁に申し上げる。まず、近畿圏広域地方計画をなぜ今やっているかという前提に立ち返ると、１０年後、近畿圏が日本と関係なく独立していると考えた時、世界、少なくともアジアの中でどうやって生きていくかという観点が必要である。
- 個別のプロジェクトや戦略はそこそこ良いが、言葉遣いでひっかかる点がある。挙げ始めるときりがないが、１１のプロジェクトを上空から眺めたとき、アジアの中でどういう位置づけを持つかの租借が足りないと思う。陸地からの視点になっていてプロジェクトの内容が狭い気がする。例えば、アジア太平洋地域の国際拠点を形成するという視点がない。また、広域観光プロジェクトで、世界からの観光客を集められる近畿という視点からすれば、ハードだけでなくもっとソフトなプロジェクトが必要である。「スルッとアジア」もつくるべきと思う。
- 国際物流と関係するが、近畿の３空港の位置づけをどうするか。伊丹が廃止されたらどうなるか。３空港をどう利用するのかを書き込まないといけない。計画策定までに合意形成と目途をつけておくべき。
- また、交通体系について、鉄道網のことが何もかかれてない。ＣＯ２対策として炭素税の導入があるとすれば鉄道も重要になる。夢洲に貨物専用鉄道を通して、そこから全国へ貨物列車で配送するという視点も重要だと思っている。
- 「ほんまもん」という言葉には私もひっかかっている。本物は偽物の対語である。関西弁で「ほんまもん」はかならずしもそういう意味ではなく、品質や使い勝手などを含むと思うが、売れるものだけを本物とするのか、売れなくても役に立つものも含むのか、「ほんまもん」の定義が分からない。偽物と違うことをどこまで意識して使っているか、見えてこない。

- 関西文化学術研究都市に「文化」という言葉を含んでいることは、新しい創造力と新しい産業を生み出すという意味でも卓越したネーミングだと思う。京都の例で言うと、茶道や華道など伝統的な生活様式を保っている人が多く、これらを支える生活道具などを京都の地場産業がつくっている。地場産業同士で小さな産業連関ができていて、そこから新商品が開発され、グローバル企業に育っている。京セラや村田製作所やオムロンなどもそうであった。文化、伝統が生活様式の中で保たれ、それを支える地場産業があることが強みになっている。文化首都圏プロジェクトでは、伝統文化様式や伝統芸能をどう守るかについても内容としてあげられるべきではないか。
- 日本海側について、今は舞鶴港が触れられているが、長期的にみるとそれだけでよいのか疑問である。日本海側は大陸との窓口としての役割があり、新しい経済圏をにらんだとき、日本海側を農山漁村活性化プロジェクトに含めてしまうだけでよいのかと思う。日本海側の都市コアをつくっていくといった大戦略のなかで当面このプロジェクトを実行するという視点が必要と思う。

（中瀬先生）

- 多自然居住地域、自然環境という側面から意見する。
- 関西の外国人向け観光パンフレットをつくる際に関西の強みは何かを議論した。大流域圏と里山が関西の特徴である。関西を語るとき大流域があることが前提になる。照葉樹林文化論があるが、照葉樹林は関西からアジアに広がり、それに伴い生活様式や文化も広がっていった。森林を水田や二次林へと転換させ、鎮守の森など自然と文化を融合させることで生物多様性を保ってきた。これらを重ねると関西の特徴が出るのではないか。近畿の能勢や猪名川にはまだ生業のある里山がある。里山と生物多様性の議論が重要である。
- 三田や丹波、淡路島、豊岡など、どこも地域でがんばっている。多自然居住地域について、各地域にテーマ性を発見していくことが活性化や観光に関係してくる。その際の課題は、人材と組織をどうするかということである。プロジェクトの推進主体は誰なのか、住民がどのように関係するか、主体の育成についても考える必要がある。
- 主要プロジェクトに関連する様々な地域のプロジェクトをどのように促進するか。これらを進めることで地域も活性化する仕組みづくりを考える必要がある。
- また、自然環境の記述を是非入れていただきたい。道路や湾岸整備などの際、環境に配慮するといった記述が必要であり、生物多様性についても是非触れて欲しい。また、人材育成やそのマネジメントの方法についての記述も必要である。

（狭間先生）

- ライフスタイルという観点で意見する。
- 関西圏の強みは、同心円状に広がっている首都圏と異なり、個性豊かな都市

があり自然の豊かさと共存していることで、その多中心の豊かさを最大限にＰＲするべきと思う。個性豊かな都市圏について、分散的な集中が必要になり、またそれぞれの都市の個性を生かし、連携・補完しながら近畿圏全体の活力をアップするためには、都市圏それぞれをどのようにネットワークするかが重要であり、その中で公共交通の見直しも大事になるであろう。生活環境、観光、経済など、どの都市もフルセットで機能を備えていくというよりも、連携して相乗効果をあげていくべきだと思う。

- ライフスタイルという話で、首都圏を選択せずに関西を選択する意味は何かを考えたら、自然と都市の両方を満喫できることなどの他に、教育の視点も重要である。中心市街地の空洞化の問題などでも後継者不足が取り沙汰される。過疎地では、医療だけでなく、教育と仕事の問題が大きい。過疎地には１０年後には後継ぎがいないというエリアがたくさんある。教育や次世代育成をもう少し盛り込んで、もっと重視して考えていく必要性がある。
- 人材と組織をどうするか、「新しい公」を推進するのにどのように組織していくのかが次の議論になる。住民、大学、ＮＰＯなどの参画、連携による仕組みをどうやってつくるかが大事である。生活に根ざしたプロジェクト推進にはこのような考え方が必要である。いろいろなことが書かれているが、人の話があまり書かれていないのが気になる。知の拠点プロジェクトについても、先の世代への教育が次の社会につながっていくのだと思うが、教育の観点が弱いのが問題と思う。

（小田先生）

- 資料の中で「近畿」、「関西」という言葉が交錯している。関西か近畿のどちらで売り出そうとしているのか、事務局の考えを聞きたい。

（事務局）

- 法律上は近畿圏であるが、中身は関西で統一しようと考えている。表題は近畿、内容は関西でと考えている。

（宮川先生）

- 本計画ではいろいろな部分が光っているが、大きなまとまった光が見えない気がする。奈良の大仏でも、大仏自体にも大きな光があり、その周りの仏様もそれぞれ個性を持って光っている。
- ６のＣＯ２削減と資源循環プロジェクトが、大学の学生レポートのような感じになっている。もう少し違ったアプローチがあると思う。ものを大事に使うことなど、サスティナブルディベロップメントが大事で、今では少し物足りない。
- 社会基盤は、文化、文明、自然を支えるべきものと考える。ダイナミックには見えないが、橋や道路は使えば傷んでくる。そのような危機感について触れられていないので、もう少しプロジェクトの中で触れるべき。

・ また、プロジェクトについて、どうやって動かすかが見えてこない。主体を明確に示すことが重要である。

（宮川先生）

・ すべての先生からご発言をいただきましたが、何か言い忘れ、その他お伝えしたい事等、ございましたらお願いします。

（黒田先生）

・ 中間整理を練るときにお願いしたいのは、主要プロジェクトは、それぞれの戦略目標を煮詰めた時に出てくるものであり、いくつかの戦略がいくつかのプロジェクトにつながっているはずである。戦略とプロジェクトを線でつないで、整理するべき。

（加藤先生）

・ 大阪湾ベイエリア再生プロジェクトについて、今は土地をどう使うかに焦点が当てられているが、ここには産業競争力の蓄積がまだまだあると思う。競争優位性について、もう少し配慮をし、その役割についても記述してもらえればと思う。

（宮川先生）

・ それでは、これで進行をお返しします。

（事務局）

・ 叱咤激励も含め、ありがたく思う。今後他圏域とどう差別化を図るか、事業主体、スケジュールなどをつめていきたい。来年まで精一杯頑張りたい。今後ともご指導よろしく賜りたい。今日はどうもありがとうございました。